

Mon Nara



Numéro299 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会

JUIN. 2022 6月号

第 150 回 フランス・アラカルト開催 (5/28)

NARAFRANCE 物語～ニースで学び、フランス大使館で働き、奈良で起業した

5月28日(土)、生駒セイセイビル会議室で、第150回フランス・アラカルトを開催し、23名(うち一般11名)の方にご参加いただきました。講師は2年前に生駒に移住して来られた法人会員の「株式会社 NARAFRANCE」の林薫子さん。副題どおり、ニースでホームステイしたとき言葉が通じなくて苦労した話に始まり、ニースの大学院でマーケティングを学び帰国、フランス大使館職員となってフランスの製品や企業を日本の関係者に紹介するため奔走した話、起業後運悪くコロナでリアル通訳がないので、語学講座や大学で教えながら、オンラインでの商談通訳やセミナーを企画しているという現在の話まで。いちばん



印象に残ったのは、フランス語の作文や面接のポイントとして、文法は間違っていでもいいから面白い話を書いたり喋ったりして相手の気を惹くことが大切、またポジティブなことを先に書けとのこと。これは役に立ちそうです。早口でエネルギーな話し方に皆さん圧倒されていました。(杉谷健治)

東京のフランス大使館で、ビジネス部門の職員としてお仕事された実績を持っておられる林さんが、奈良で起業されたことで、これから文化面だけでなくビジネスの面でも、奈良とフランスとの間を取り持って広がって

ってくださいのでは、と心強く感じました。余談ですが、今日のお召し物が、昔よくテレビに出演されていたフランソワーズ・モレシャンさんから、「Très élégante ! Très jolie ! 」と言われたワンピースだと紹介されました。林さんのすごい経歴に圧倒されていた中で、お茶目な一面も垣間見ることができました。(藺田章恵)

フランスでは今、玄米茶が流行っているのだとか・・・林さんのお話を思い返しながら、日本とフランスをつなぐ彼女のお仕事を想像しています。そういえば、数年前に奈良市の日本酒とお茶のメーカーの方々が、フランスでの販路を広げるためにパリとベルサイユでデモンストレーションをしたことがありますが、何か他にも良いものがあるはず、もしかたそんな機会があればぜひご紹介したい、などと勝手に妄想しています。今回のフランス・アラカルトには、林さんの生徒さん達やお母様、叔母様、ご親戚の方々までもが参加され、最後に叔母様が手を挙げて「姪が大使館を辞める時には大使が送別会をしてくださ、それはとても珍しいことだったんですよ・・・」とおっしゃいました。彼女がいかに才能にあふれ、いかに努力されてきたかがわかるご発言でした。皆様に愛され尊敬されているパワフルな林さんの今後のご活躍を楽しみにしております。(喜多幸子)

栄えある第150回フランス・アラカルトで「NARAFRANCE 物語」として、フランス語との関わり、フランス大使館での仕事、そして奈良で起業したこと等、をお話させていただきました。これまで大学講師等の経験はありますが、奈良日仏協会というフランスに関わりがあり人生経験も豊富で幅広い年齢層の皆様にお話することははじめてで、どんな内容がいいか、実はかなり練習をしました。当日は参加者の皆様の「聞き上手」に助けられ、早口で話すぎてしまいました。皆様からいろいろなお質問があり、皆様のご興味の広さ、深さにも感動しました。そして奈良に移住して2年、いよいよ日仏の本格往来がはじまるこの時期に皆様に直接お話できる機会をいただき本当に光栄でした。やはりリアルな集まりはいいですね。そして今回のご縁をいただいた奈良日仏協会のますますの発展を祈っております。Bonne continuation!! (林薫子)



「モリエールの喜劇」(11)『女学者』(Les Femmes savantes, 1672)

山本 邦彦 (やまもと くにひこ)

『女学者』は5幕韻文の、モリエールにとっては最後の本格喜劇です。初期の出世作『才女気取り』と同様、プレジューズをテーマにしていますが、構成といい文体といい、また人物性格の的確な描写といい、その出来栄は前作と比較になりません。

富裕な町人クリザールは俗っぽくはありますが健全な常識人です。しかし気が弱く、妻フィラマンの尻に敷かれています。一方妻の方は家事はおろそかにして、長女のアルマンド、義妹のベリーズとともに、文法、文芸、天文学などにうつつを抜かしています。次女のアンリエットだけは気取った趣味(プレシオジテ)に染まらず、平凡な家庭生活を望んでいます。その彼女が、母親が押しつけてくる街学者トリソタンを拒絶していかにして恋人クレアントとの結婚にたどり着く。筋だけ見ればこれは比較的単純な芝居です。

フィラマンたちはヴォージュラの文法書どおりの規範的フランス語を話すように努めています。望遠鏡で月を観察しています。アリストテレスやプラトンやエピクロスの名前を挙げて好悪を述べあい、デカルトについてはその微粒子説、渦巻説、落星説を論評しあいます。学者としてはともかく当時とすれば相当の知識人ですが、モリエールは彼女たちを、生活から遊離して空理空論をもてあそぶ愚か者として痛烈に風刺します。

フィラマンは女性蔑視の学会に怒り、女性アカデミーの創設を考えています。「わたくしは、全女性になりかわって、男性がわたくしたち女性を蔑視し、不当にも低い地位に置き、また女性の才能を、取るに足りぬ仕事ばかりに向けさせ、崇高な学問の扉を閉ざしていることにたいし、断固として復讐しようと思うんです」。この創設案、はたして荒唐無稽と笑えるのでしょうか？ ジェンダー格差の是正が重大課題となった21世紀のこんにち、『女学者』は作者の意図せぬところで、新たな問題を突きつけてきました。



コメディ・フランセーズ

映画『モリエール 恋こそ喜劇』

三野 博司 (みの ひろし)

『Mon Nara』に好評連載中の「モリエールの喜劇」に関連して、今回編集部から映画『モリエール 恋こそ喜劇』について書くようにとの依頼を受けました。まったくの偶然ですが、今年1月、放送大学奈良学習センターの「映画を観る会」でこの作品をとりあげたばかりです。「映画を観る会」は、放送大学のサークル活動のひとつで、月に1回の開催、そのうち年に2回はフランス映画を観ることになっていて、私が作品を選択し、解説しています。所長時代からの慣習ですが、退職後も続いています。映画選択の基準は、通好みのものではなく、だれもが親しめて、一緒に楽しく見ることができるもの、です。というわけで、悲劇よりは喜劇、それも恋愛喜劇を選ぶことが多いのですが、今回もまさに喜劇王モリエールの生涯を恋愛とからめて描く作品でした。

『恋におちたシェイクスピア』(1998、米・英)という、若き日のシェイクスピアと彼を信奉する上流階級の娘との恋愛を描く映画がありましたが、それとやや似た手法で、『モリエール 恋こそ喜劇』(2007、仏)はつくられています。フランス人にとっては、モリエールは古典中の古典、だれもがその作品になじんでいます。この映画はそのことを前提として、モリエールの主要作品をパロディ化しながら、同様の出来事が、作家がパリで成功するまでの地方巡業時代にすでに彼自身の体験として存在していたという仮説で成り立っています。そのため若干の予備知識が必要なのですが、放送大学の「映画を観る会」では、上映前に資料を配布し、そして上映開始後も物語が動き出すまでの導入部分ではビデオを止めて、モリエールの生涯とその作品について解説を行いました。

モリエールの主要作品『タルチュフ』『人間嫌い』『町人貴族』『気で病む男』は読んでおくことが望ましいですが、その時間のない人はこの映画を観る前に、『Mon Nara』連載「モリエールの喜劇」の再読をお勧めします。



映画ではロマン・デュリス、ファブリス・ルッキニー、リュディヴィーン・サニエら、フランス映画を代表する俳優たちの怪演も見物です。

ホームズ物語とフランス (7) 長谷川 明子 (はせがわ あきこ)

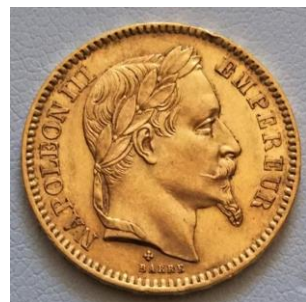
長編4編、短編56編の「ホームズ物語」の中で、常に人気作に挙げられるのが、「赤髪組合 The Red- Headed League」(1891 年) である。今年 1 月 15 日の朝日新聞の「今こそ！読みたいシャーロック・ホームズ」という記事では、読者人気投票においてこの作品が 3 位に挙がっており、「死者が出ないのどかな話」という読者のコメントも載せられている。少し古いが、「日本シャーロック・ホームズクラブ」による 1992 年の人気投票では 2 位。1934 年創立の世界で一番古シャーロキアン団体、ニューヨーク市に本部がある「Baker Street Irregulars」の 1944 年のデータでも 3 位である。興味深いのは、コナン・ドイル自身が自作のランク付けをしていて、この作品を 2 位に選んでいる(『ホームズなんでも事典』2009 年、青弓社参照)。ちなみに、上述したすべてのランク付けで、「まだらの紐 The Speckled Band」(1882 年) がトップである。

ある質屋の建物と背中合わせに銀行があり、フランス銀行からナポレオン金貨 (※) 3 万枚を借り入れて地下の金庫に保管していた。赤髪が見事な質屋の主人を「赤髪組合」が提供するおいしい仕事があると誘い出して店から引き離し、その隙に銀行まで地下道を掘り進め金貨を強奪する策略。しかし、その手口は全てホームズの推理で暴かれ、犯人が地下道から頭を出した瞬間にお縄となる。仕事に応募してくる赤髪の男たちが街にあふれている様子など作品全体がユーモラスで、残酷な場面は一切ない。

見事なホームズのお手並み。思わず、「君は人類の恩人だよ」と口走ったワトソン博士に、ホームズは少し照れながら、「少しは役に立つかね。《人はむなしく、業績こそすべてだ》(※) と、フロベールがジョルジュ・サンドに書き送ったようにね。...it is of some little use. “L’homme c’est rien- l’oeuvre c’est tout” as Gustave Flaubert wrote to George Sand.」と、フランス語の引用句を使っているのも粋である。

※「ナポレオン金貨」(右画像)：フランス銀行を設立したのはナポレオン I 世だが、《赤髪組合》で登場するナポレオン金貨を鑄造したのはナポレオン 3 世、金貨の肖像もナポレオン 3 世である。1852 年から 1870 年にかけて発行された 20 フラン金貨。金貨一枚に含まれる金の含有量が多いので、金庫に眠っていた 3 万枚は時金にすれば 2 万 2 千ポンドあまりの価値があった。

※「ホームズが引用したフロベールの言葉」：1875 年 12 月 30 日頃、フロベールはサンドからの手紙に「(作者は) 神が自然における以上に現れるべきではないと思います。人は何者でもありません。作品が全てです。」と返信。フロベールは、文学の先輩としてのサンドと書簡をやり取りし、サンドの家族とノアンでクリスマス休暇を過ごしたこともある。小説中になされたフランス語の引用を通じて、「ホームズ」の作者コナン・ドイルの文学性を垣間みることができる。



私の好きなワイン (5) 「フランスの三大ロゼ」 小寺 順子 (こてら じゅんこ)

ワインと言えば赤と白が主流だが、ロゼもある。日本のワイン通の人の中にはロゼは飲む必要がないという人もいるが、その色の美しさを見ると、私などは飲みたくなる。ワインで一番先に作られたのがロゼで、その製法が確立してから赤や白がつくられるようになったので、歴史的にも重要である。ロゼはその色から少し甘口なのではないかと思ってしまうが、実は辛口の方が断然多い。

フランスには「三大ロゼ」というのがある。その一つがロワール地方のアンジュ&ソーミュール地区のロゼ・ダンジュ(rosée d'ange) である。これはどちらかと言えば少し甘口でフルーティーである。つづいては、コート・デュ・ローヌ南部のタベル・ロゼ。これは、きりっとしたかなりの辛口になる。最後にプロヴァンス・ロゼだが、このロゼに関しては面白い経験がある。

4 年ほど前に南仏に一月滞在し、プロヴァンスのワインをいろいろ飲んでみた。ところがどのワイン屋もスーパーマーケットもロゼワインで埋め尽くされ、赤や白は隅の方に押しやられている。店全体がバラ色で美しい。プロヴァンスではそれほどロゼワインが飲まれているということである。私たちは「バンドール」という名のワインをもっとも多く飲んだ。バンドールには赤も白もあったが、ロゼを一番よく選んで飲んだ。日本に帰ってからはバンドールを買う気はしない。というのも現地価格を知ってしまったからである。だいたい日本の半額ぐらいではないかと思われる。またプロヴァンスには、《vol de nuit》というロゼワインもあるらしい。サンテグジュペリの『夜間飛行』という作品とどう関係があるかはわからないが、はじめに知っていれば現地で飲んだのだが、今となっては日本で買うしかない。早くコロナが収まってまたフランスにワインを探しに行きたいものである。



Château de Fesles
(ロゼ・ダンジュ)

ブルースト雑感 (2)「日本風サラダ」とは？ 浅井 直子 (あさい なおこ)

現在、日本の食文化の豊かさはフランスでもよく知られるようになり、レストランのメニューに「日本風サラダ *salade japonaise*」があっても不思議はなく、豆腐を使ったものや、胡麻・柚子・醤油の味をきかせたドレッシングなどが、想い浮かびます。しかし今から 140 年程前、19 世紀後半のパリのブルジョワや貴族たちの間で「ジャポニスム」がもてはやされた時代、「日本風サラダ」はサロンの最新流行の話題になっていました。いったいどういうわけだったのでしょうか？

ブルーストの小説『失われた時を求めて』『スワンの恋』のヴェルデュラン夫人のサロンでは、『椿姫』の作者デュマ・フィスの新作戯曲『フランシヨン *Francillon*』(1881) が話題にのぼります。その芝居を観たコタール夫人は、「テアトル＝フランセの舞台でサラダのレシピを教えろとは！」と腐しながら、会話相手のスワンに日本風サラダのことを口にします。『フランシヨン』では、花嫁修業中の若い娘アネットが、料理教室で習った「日本風サラダ」の作り方を、台詞の中で具体的に話すのですが、そのレシピの中身は、おおよそ以下のようなものです。

- 1) ジャガイモをゆで、薄切りにし、温かいうちに塩・胡椒・上等のオリーブ油・酢で味つける。
- 2) エストラゴンまたはオルレアンハーブを加え、グラス半分の白ワイン又はシャトー・ディケムを加える。
- 3) 大きめのムール貝をセロリの茎とともにクールブイヨンで煮て、水気を切る。
- 4) ムール貝 (ジャガイモの約 3 分の 1 の量) を味つけの終わったジャガイモに加え、全体を軽くまぜる。
- 5) さいごにトリュフの薄切りを全体にふりかけ、シャンペンで煮つめる。

これは架空の「ジャガイモとムール貝のサラダ」なのですが、《日本風サラダ》と口にすれば、デュマの戯曲を観たしるしとなり、その人が流行に通じていることを暗に意味しました。ブルーストはそうしたサロンの会話を切りとって、当時の社交界の人々のやたらに流行を追いかける風潮を、少し皮肉な目で眺めていたようです。

さてこの「日本風サラダ」、じっさいに食べてみたくなり、昨年 6 月に私の家の近所にカウンター 6 席のフレンチ居酒屋 Le Nord を開店した、以前当協会法人会員だったシェフの北田浩久さんに、自分流にアレンジして作ってもらえないかお願いしたところ、快諾してくださいました。先日、美味しく賞味させていただきながら (上写真)、一瞬 19 世紀パリのサロンを覗いたような気分をも味わいました。



法人会員紹介 ワインショップ「サン・ヴァンサン」 <https://stvincent.shop-pro.jp/>

サン・ヴァンサンは 2002 年に東生駒で奈良初のワイン専門店としてオープンして、この 9 月で 20 周年を迎えることになりました。この 20 年の間にワインを取り巻く市場は大きく変化し、人気のワインは投機の対象となって信じられないような価格がつけられ、もはやワインが好きな普通の人が簡単に手に取ることは出来ないようになってしまいました。それでも、世界には様々な国で素晴らしい志をもってワインを造っている生産者が沢山います。ワインの名前や生産者の名前を追いかけていけば、お手頃で良心的な価格でも美味しいワインは沢山あります。サン・ヴァンサンではこれからもそんなワインを探し求め、一人でも多くの人にワインの素晴らしさをお伝えしていければと思っています。

さてここで、奈良日仏協会の会員の皆様に、いまお勧めのワインを紹介させていただきます。ブルゴーニュの白ワインと言うとやはり「シャルドネ」が有名ですが、「アリゴテ」というブドウ品種で造られるワインも造られています。アリゴテは、通常シャルドネよりもキリッとした酸を持ち少し軽やかな感じですが、2019 年のようにブドウの出来が良かった年には、しっかりと果実味と酸のバランスがよく取れた、心地よい飲みくちのワインとなり、ブルゴーニュではエスカルゴとのマリアージュが人気です。ムルソー村を代表する造り手が当り年に造りだしたこのワインは、コスト・パフォーマンス抜群のオススメの 1 本です。

- ◆ワイン名：ブルゴーニュ・アリゴテ 2019 年
- ◆生産者：ピエール・モレイ
- ◆上代価格：2,200 円 (税抜き)
- ◆特別価格：1,600 円 (税抜き)

他にも店内には、多数のワインを取り揃えています。皆様のご来店をお待ちしております。



奈良市学園朝日町 2-2 米田ビル 102
Tel : 0742-43-3832
定休日：毎週月曜、第 2・第 3 火曜
営業時間：10:00～19:00
店長：竹中宣人 (たけなか のりひと)

自然と調和して生きる：東洋と西洋の間で

(VIVRE EN HARMONIE AVEC LA NATURE, A MI-CHEMIN ENTRE ORIENT ET OCCIDENT)

フランソワーズ・バール・フィロッシュ

Née en France, je vis à Paris où j'ai découvert au Musée Guimet la calligraphie japonaise avec Yuko Suzuki, puis la peinture japonaise, le Nihonga, avec mon professeur des Beaux-Arts de Kyoto.

Mon mari et moi avons alors décidé d'apprendre le japonais, puissamment aidés par notre professeur Saori Nakanishi ; et de partir à la découverte de ce pays. Dès le premier voyage en 2012, nous avons été séduits par le charme tranquille de la ville de Nara, sa forêt, ses temples, et ses daims. Puis par le mont Koya, Kyoto et la sérénité de ses jardins secs, et enfin Tokyo et ses multiples visages.

Depuis nous retournons tous les ans au Japon, à des époques différentes, avec toutefois une prédilection pour l'automne et la magie des couleurs de Momiji. J'en profite pour y chercher les pigments, feuilles d'or, d'argent, et de platine, pinceaux, ..., tout le matériel nécessaire pour pratiquer cette peinture qui me passionne. Et plus encore pour découvrir pas à pas cette culture profonde, secrète, qui fait du Japon un pays à part, et magnifique.

Nous attendons la fin de la pandémie Covid pour pouvoir y retourner.

(Françoise Bar Filoche)

私はフランスで生まれ、パリに住んでいます。パリのギメ美術館で、鈴木ゆうこさんから日本の書道を、続いて京都芸術大学出身の先生から日本画を学び発見しました。それから、夫と私は、日本語教師の中西さおり先生の力強いお力添えで、日本語を学び、日本発見の旅に出ることを決意しました。

2012年のはじめての日本旅行の時から、奈良の町の落ち着いた佇まい、森、お寺、鹿たちに、魅了されました。それから高野山、京都とその庭園の静謐さ、さいごは東京とその多様な表情に惹かれました。

以来、私たちは毎年、異なる時期に日本を訪れていますが、秋と紅葉の色合いの魅力は格別です。この機会を利用して、顔料・金箔・銀箔・白金箔や筆など、私が夢中になっている日本画を制作するために必要な材料を探しています。そしてさらに、日本を特別で素晴らしい国に築き上げた、この深くうちに秘めた文化を一步一步発見しています。

コロナの世界的流行が終わって日本に再訪できることを待ち望んでいます。



奈良への旅行中に撮影した写真



《フランソワーズさんの日本画作品》

左から、「Soleils noirs et voie mauve 黒い太陽とモーヴ色の道」、「Naikan 内観」、「Enso 円相」。

※フランソワーズさんの「Nihonga 日本画」を紹介するサイトがありますので、この機会にぜひ一度ご覧になってください。

francoise-barfiloche.com <<http://francoise-barfiloche.com/>>

フランス大統領選挙 2022

PETIT BILAN DE L'ÉLECTION PRÉSIDENTIELLE FRANÇAISE DE 2022

ピエール・シルヴェストリ

Emmanuel Macron repart pour cinq ans. Le Président sortant a été réélu dimanche 24 avril 2022 face à Marine Le Pen, recueillant 58,55 % des suffrages exprimés, soit 18 768 639 voix. Une victoire à l'issue d'une campagne particulière, qui n'a pas particulièrement intéressé les Français, l'abstention a été quasi-historique au 2e tour avec 28,01 % des électeurs, soit 13 655 861 inscrits, un record depuis 1969 (31,1 %).

La France est désormais coupée en trois grandes tendances politiques : le bloc majoritaire, libéral et progressiste, incarné par Emmanuel Macron ; le bloc conservateur et nationaliste porté par Marine Le Pen ; le bloc de gauche radicale mené par Jean-Luc Mélenchon. La France est donc tripartite, loin du clivage traditionnel connu durant des décennies entre la gauche et la droite : au président de la République les territoires les plus aisés, à sa rivale extrémiste la France rurale, au tribun de la gauche les terres populaires et quelques grandes villes.

S'il a une nouvelle fois été porté au pouvoir, le projet d'Emmanuel Macron a recueilli moins d'adhésion qu'en 2017. S'il a obtenu davantage de voix au 1er tour en 2022 que cinq ans auparavant (+1,1 million), moins de suffrages ont été comptabilisés en sa faveur au 2e tour de 2022 par rapport à 2017 (-1,9 million).

Pour la première fois de l'histoire, le Rassemblement national de Marine Le Pen a pour sa part dépassé la barre des 40% à une élection présidentielle au second tour. Jean-Luc Mélenchon, le candidat de la France insoumise, a échoué à la troisième place le 10 avril, lors du premier tour de scrutin, avec 21,95 % des voix, soit 7 712 520 suffrages.

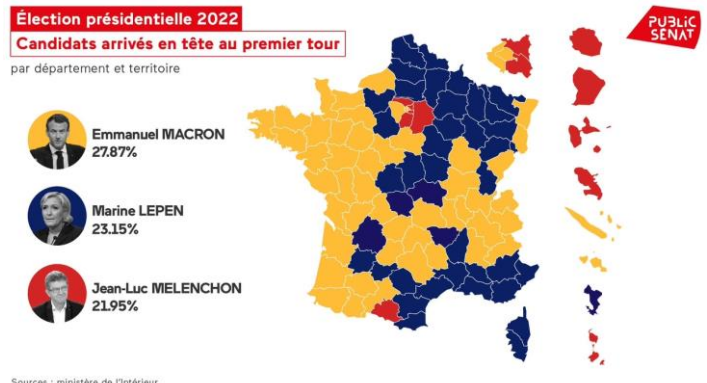
Cette élection a également été marquée par un tournant majeur : la fin des partis historiques. Le Parti socialiste et sa représentante Anne Hidalgo terminent avec le score de 1,75 %. Un scénario tout aussi catastrophe s'est dessiné chez Les Républicains. La candidate Valérie Pécresse a obtenu un résultat de 4,78 %. Les frais de campagne des deux partis ne seront pas remboursés (faute d'avoir atteint 5 %). La déroute est totale, symbole de la nouvelle ère politique. (Pierre Silvestri)

エマニュエル・マクロンはこれからの5年間に向けて再出発した。任期満了した大統領は、マリーヌ・ル・ペンに対して、有効投票の58.55%、1876万8639票を集めて、2022年4月24日（日）に再選された。フランス人の関心を取りたてて集めなかった特殊なキャンペーン後の勝利であり、第2回目の投票の棄権は28.01%の1365万5861票で、ほとんど歴史的だった。これは1969年の31.1%以来の記録である。

フランスは今後、マクロンに体现されるリベラルで進歩主義者の多数派ブロック、マリーヌ・ル・ペンに支えられる保守主義者と国家主義者のブロック、ジャン＝リュック・メランションに率いられる急進的左派のブロック、の3つの大きな政治傾向に分断される。それは、ここ数十年の間に経験した左派と右派の伝統的な分裂とはほど遠く、共和国大統領にはもともとゆとりのある地域、彼の過激思想のライバルには農村部のフランス、左派の雄弁家には民衆的な地域といくつかの大都市、の3つにフランスは分かれている。

マクロンが新たに権力の座についたとしても、彼の計画は2017年よりも支持者は少ない。たとえ彼が、2022年の第一次投票で5年前よりも多くの票を得たとしても（110万票の増加）、2017年の投票に比べて2022年の第二次投票の有効投票は少なかった（190万票の減少）。

史上はじめて、マリーヌ・ル・ペンの国民連合は、大統領選の第二次投票で40%の水準を越えた。「不服従のフランス」の候補者ジャン＝リュック・メランションは、4月10日の第1次投票で21.95%、771万2520票で、3位に終わった。今回の選挙は歴史的に重要な政党の終焉という大きな転換点として特徴づけられた。社会党とその代表者アンヌ・イダルゴは、1.75%の得票に終わった。まったく同様の破滅的な展開は、共和党においてもはっきり現れた。ヴァレリー・ペクレス候補が獲得したのは4.78%という結果だった。これら二つの政党のキャンペーン費用は、払い戻しされないだろう（5%の得票に達しなかった）。完全な敗北は、新しい政治の時代の象徴である。



日本再発見 Le Japon retrouvé (2)

「公共交通機関内の静寂」 « le silence dans les transports »

バチスト・レタヨ

Nous continuons aujourd'hui notre petite remontée des souvenirs des choses qui m'ont marquées à mon arrivée au Japon. Après « les machines » du premier article, je vous propose un thème un peu plus tranquille : le silence dans les transports.

A peine le pied posé sur le sol japonais, j'ai tout de suite été saisi par l'acoustique très différente de l'aéroport. Tous les sons semblaient brefs, comme capturés, étouffés, et alors que des centaines de personnes débarquaient au même moment, c'était quasiment le calme plat. Pas d'écho, pas de brouhaha de foule... Après 12h d'avion et le bourdonnement constant des moteurs dans les oreilles, inutile de dire que ce changement d'environnement était le bienvenu !

Cette sérénité phonique a continué une fois dans le train. Un couple de personnes âgées assis en face de moi chuchotant à voix basse me dévisageait du regard alors que je vérifiais les kanjis de 「利息」 sur mon "denshi jisho" Casio. A coté de moi une lycéenne plongée en pleine lecture d'un ouvrage dont elle avait soigneusement caché la couverture, un peu plus loin dans le wagon un salaryman assoupi sur la banquette. Et tout du long du trajet, le roulis du train pour seul bande-son avec les annonces d'ouverture des portes comme refrain. Personne accrochée au téléphone à "raconter sa vie", pas même une sonnerie, tout juste quelques ronronnements de vibreurs. Un silence de cathédrale... et encore Notre Dame est certainement plus animée !

Même chose en centre ville, malgré la circulation très dense je continue d'être frappé par le peu de bruit généré par les pneus sur l'asphalte et les moteurs. Des voitures plus légères ? Plus récentes ? De plus petite cylindrée ? Un revêtement différent ? Aujourd'hui encore je m'interroge sur les origines de cette différence. Une chose est sûre, les automobilistes japonais sont plus patients que les français. Malgré les bouchons aucun bruit de klaxon!

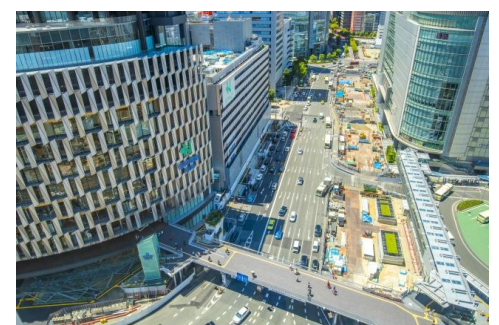
(Baptiste Retailleau)

今回も、私が日本到着時に気づいたことの思い出に少しさかのぼってみましょう。前回の「機械」についての記事の後で、もうちょっと静かなテーマ、公共交通機関内の静寂について、書くことにします。

日本の地に足をおろすやいなや、私はすぐに空港の異なる音響に驚かされました。すべての音が、捕えられて窒息しているかのように、短く思われました。そして数百人が同時に降車しているというのに、ほとんど風みtaiでした。雑踏のこだまもざわめきもありません。12 時間の飛行と耳にずっとモーターのうなり音がしていた後でしたので、言うまでもなくこの環境の変化は歓迎でした。

この音の平穏さは、列車の中でも続きました。私の向かいに座っていた高齢の夫婦が小声でささやきながら、私の顔をしげしげと見ている間、私はカシオの《電子辞書》で「利息」の漢字のチェックをしていました。隣の席の女子高校生はある作品の読書に没頭していましたが、彼女は注意深くその本の表紙を隠していました。同じ車両の少し離れたところには、横長の座席の上でまどろんでいるサラリーマンがいました…。そして移動中ずっと、歌のリフレインのような、ドアが開きますというアナウンス音のテープだけで、列車が横に揺れていました。「長々と無駄話をする」ために電話にくっついていない人はいませんし、呼び出し音さえ一度もありません。携帯電話の振動板の低い持続音は少しありましたが。大聖堂の静寂みたいですが…。いやノートルダム寺院だってもっと活気があるでしょう！

街の中心部でも同じです。交通量が多いにも関わらず、アスファルト上を走るタイヤとモーターが車に生じさせる騒音はほとんどありません。車自体が軽いのか？ 最新なのか？ 排気量が少ないのか？ コーティングの仕方が違うのか？ いまでもまだ、私はこの違いの原因について自問しています。ひとつ確かなのは、日本のドライバーはフランス人よりも我慢強いことです。渋滞にもかかわらず、まったくクラクションの騒音がないのですから！



コンシエルジュリーでのコンサート

角田 茂 (つのだ しげる)

今から約 40 年前、パリ留学をしていた私は、よくクラシック音楽のコンサートに行った。日本で不可能であったことがフランスで可能となったことには、二つの要因があった。第一に、私の長期滞在許可証 (carte de séjour) が学生となっていたことである。これを提示すると、シャンゼリゼ劇場、プレイエル劇場、ガヴオー劇場などすべての劇場が 10 フラン (当時の日本円で 300 円) で入ることができた。観客席は 3 階天井桟敷 (deuxième balcon) の自由席であるが、舞台の眺めもよく全く問題はない。私はフランス政府の外国人留学生に対する手厚い援助に驚嘆した。第二に、コンサートの開始時刻がほとんど午後 8 時 30 分であったことである。フォッシュ病院脳神経外科で外国人レジデントとして研修をしていた私は、午後 7 時頃解放されるが、夕食をゆっくりととっても、十分コンサートに間に合った。



セーヌ河岸のコンシエルジュリー
(世界遺産オンラインガイドより)

コンシエルジュリーは、シテ島北西部、セーヌ川沿いにあるゴシック建築の建物である。ノートルダム大聖堂やサン・シャペルとともにシテ島の 3 大ゴシック建築と言われている。フランス革命時は牢獄として使用され、マリー・アントワネットが処刑前の 2 カ月半、ここで過ごしたことでも有名である。スタニスラフ・ブーニンがロン・ティボーコンクールで優勝する約 1 カ月前の 1983 年 10 月、このコンシエルジュリーでフルートの演奏会があることを知った。フランス人の友人に相談すると、コンシエルジュリーは観光客にまだ開放されていないので、演奏会は別として、内部を見学してくるべきだと助言してくれた。演奏者はガブリエル・フュメーで、私にとって無名の演奏家であった。演奏会場は、アーチ型の柱が規則的ではあるものの、多く存在する薄暗い広間で、演奏者は彼ひとりであった。数曲演奏された後、最後にバッハ作曲、無伴奏フルートのためのパルティータ (イ短調 BWV 1013) が演奏された。

非日常的な演奏会場の中で響き渡る冒頭のアルマンドを耳にするや、私の頭の中にマリー・アントワネットの人生が甦って来た。7 歳の時、シェーンブルン宮殿で 6 歳のモーツァルトと出会ったこと。将来国王となるルイとの結婚。ポンパドゥール夫人から受け継いだプッティ・トリアノンの庭園改造。ヴァレンヌ逃亡の失敗と逮捕など、走馬灯のように私の頭の中に浮かんで来た。あのヴァレンヌ逃亡がなかったら、フランス革命は立憲君主制の政治体制で終わっていたかもしれない。エルヴェシウス夫人のサロンに集まる米国大使フランクリンや医師ピネルなど、革命推進派の知識人も、革命の落とし所として、立憲君主制を考えていた。

バッハの作品は、学生時代、管弦楽組曲第 2 番とブランデンブルク協奏曲第 5 番を室内楽クラブで演奏した。いずれもフルートの活躍する名曲であった。私はオルガン曲を好んで聴いている。オルガンの演奏会は、ほとんど教会で行われていた。私はノートルダム大聖堂、サン・スルピス教会、マドレーヌ寺院などでオルガンコンサートを聴いたが、いずれのコンサートでも迫力があつた。地の底から沸き上がってきて体感できる低音、天から降ってきて耳もとに迫る高音、私はパイプオルガンの音に圧倒された。日本に帰って来て、ザ・シンフォニーホールで行われたオルガンコンサートに行っても、パリで経験したあの迫力はなかった。その原因が長い間不明であったが、新型コロナウイルス感染症のパンデミックのおかげで、その原因が判明した。いずみホールで行われた観客数半分のコンサート、以前行われた満席のコンサートの時より、はるかに迫力があつた。この時私は、演奏会場の残響時間の問題であると確信した。観客数が半分に、吸音力を持つ人間が減少し、その結果、残響時間が延びたのである。一般にコンサートホールは、満席時残響時間が 2 秒に設定されている。ヨーロッパの石造りの大きな教会において、空席時残響時間は 6~8 秒で、満席時残響時間は 4~6 秒と言われている。このことを考えると、コンサートホールでのオルガンコンサートにおいて、ヨーロッパの教会におけるオルガンコンサートのような迫力がないのは当然である。オルガンコンサートの理想的な満席時残響時間は 4 秒と言われている。

この文章を書くにあたって、ガブリエル・フュメー (Gabriel Fumet : 1937-) を Wikipédia で検索すると、パリ国立高等音楽院を首席で卒業したフルート奏者で、現在も活躍と書いてあつた。YouTube で検索すると、なんと無伴奏フルートのためのパルティータが出てきた。早速聴いてみると、息継ぎを全く感じないすばらしいもので、マリー・アントワネットのことが、再び私の頭の中に甦って来た。あのときの会場は、かなり残響時間が長かったと思われる。

「カルメン」についての考察 竹本 寿史（たけもと としふみ）

オペラ『カルメン』は、世界中で広く愛されているジョルジュ・ビゼーの最高傑作。とはいえ、1875年（日本では明治7年）のパリのオペラ・コミック座での初演は失敗に終わりました。落胆したビゼーは3か月後、扁桃腺炎とリュウマチをこじらせ36歳の若さで亡くなります。この台本は、プロスペル・メリメの小説『カルメン』（1845年）を元にして、アンリ・メイヤックとリュドヴィック・アレヴィが書きました。この度、小説『カルメン』とオペラの初演版台本（日本語訳）を読む機会があり、疑問に感じた3つの点について、自分なりに考察してみました。

1) カルメンは、ドン・ホセを愛していたのか？ 小説で描かれるカルメンは、ボヘミアンの「仕事」仲間と強く結ばれ、彼らの仕事（密輸や追い剥ぎ）の諜報面を一手に引き受けている。カモになりそうな客に近づき、実行部隊が仕事を遂げられるように手助けし、そんな仲間との仕事を生き甲斐としている。第二幕は、刑を終えたホセが、カルメンに会う為にリーリヤス・バステアの店にやって来て、再会する場面である。

ドン・ホセをもてなすために踊り始めたカルメンは、帰宮の合図のラッパを耳にして帰ろうとする彼を「私よりも軍隊への忠実心の方が大事なのか」と罵る。罵り合いの末、ドン・ホセは、牢獄で、干乾びてしまってもいい香りを放すアカシアの花を眺めながら、徐々にお前の虜になってしまったことを告白する「花の歌」を熱唱する。いっぽうカルメンは、「空は広々、人生はさすらい、全宇宙は我が祖国、あんたの意思がその掟！とりわけ人を酔わせるのは、自由！自由！」と、さすらいの生活を賛美する歌を歌う。二人の心のありようを見ると、ドン・ホセの愛は溺愛であるのに対し、ホセに対するカルメンの愛は密輸団の仲間になることが前提として成り立っており、そういう仕事の相棒として頼りになりそうな男として愛した、打算的な愛ではないかと思われる。

2) カルメンは、なぜドン・ホセに殺されるのを受け入れたのか？ 私が最初に思いついたのは、「カルメンはドン・ホセを愛していたから、愛する人に殺されることを望んだ」というもの。しかし、カルメンはそれ程まで彼を愛していたわけではない。この疑問は私を悩ました。第三幕でカルメンはカルタ占いを始める。「占いは何度やっても、私達は死ぬ運命にある。私が先に死んで、お前が後で死ぬと出る」と、カルメンは悲痛に叫ぶ。そのことは知っているが、それはそれだけのことで、死を避けることはできたはずだと私は考えてしまう。

その後、小説『カルメン』の「あとがき」を読んで、物語とは関係のない放浪民族「ボヘミアン」に関する学術的な解説を記した第4章が、後から追加されたことを知った。ドン・ホセの数奇で悲劇的な物語とこの章は何のつながりがあるのか、メリメはなぜこんな解説を加える必要があったのか？ その意味を考えて思った。メリメは、後日になって、カルメンの行動・考えを正しく理解するためには「ボヘミアン」についての知識を持つことが必要だと考えたのではないだろうか？ そうだとするなら、ボヘミアンであるカルメンにとって、占いは絶対的なものであったのだ。彼女がホセに殺されるのを受け入れたのは、占いから逃げられなかったから、ということになる。

3) 私達は、なぜカルメンに魅了されるのか？ カルメンは生粋のボヘミアンであり、受け継がれてきた風習・掟に束縛されて生きている。そういう意味では自由人ではない。しかしなぜか、カルメンは自由な恋愛をし、自分の想いのままに生きる自由人というイメージを、我々は持っている。そして、そんな強い個性をもったカルメンに魅了されてしまう。そのカルメン像は、一体どこから生まれたのだろうか？

オペラの第1幕で、カルメンが初めて登場する時に歌う「ハバネラ」の歌詞に注目してみよう。「恋は自由気ままな野生の鳥 飼いなすなど誰にもできやしない 例えば呼んでも無駄な事、そいつは逃げ去るだけ…。恋は気ままなボヘミアン 法の鎖にや縛られない あんたがいやでも あたしはいいのさ あたしが惚れたら、覚悟するんだね」。ここに歌われている恋愛観は、現代もなお色あせるところかますます輝きを増し続けている。

この歌は当初の脚本にはなかった。初演でカルメン役を演じたセレスティヌ・ガッリ＝マリー（右写真）の「もっと華々しく登場したい」との要望に応じて、ビゼーは「ハバネラ」を急遽組み入れた。勿論、歌詞も新たに作成された。その内容は、メリメの小説を忠実にオペラ化しようという意図よりむしろ、カルメンが登場するのに相応しい効果を狙うことに注力された。そのおかげで、小説のカルメン像とは趣の違う「自由人カルメン」が生み出されることになったのではないだろうか？ こう考えると、カルメンに魅了される一因は、ハバネラにあると言えるかもしれない。



ピカソの色

神澤 透 (かんざわ とおる)

飛行機がパリ・シャルル・ドゴール空港を目指して下降を始める頃、窓の外は赤や白、黄色、オレンジ色、ラベンダー色などの彩りの花畑が格子状になって広がっていました。機体は右へ旋回したり左に旋回したりしながら、この広大な色の海をなめるように飛行し続けます。ぼくのヨーロッパとの出会いは、この鮮やかな色でした。その色は、パリ到着翌日に訪れたマレ地区にある国立ピカソ美術館 (Musée Picasso, Hôtel Salé) の絵画にも見出すことが出来ました。

パリには、一人の芸術家のためにこんなにも立派な美術館が存在するのか、とオルセーやルーブルに行く前に圧倒されたのを覚えています。そして適度なひと気のなかでの静けさ、絶妙な空間の使い方に、この国の美術館の奥深さを感じ取ったものです。

ピカソは、日本人には馴染み深い芸術家の一人と言えるでしょう。箱根の広大な庭園美術館である彫刻の森美術館にはピカソ館がありますし、列島の北から南に至るまで多くの美術館がピカソを所蔵しています。そんなピカソ好きの日本人にとってパリの美術館は垂涎の的といえます。その価値は、収蔵品がピカソの遺族が相続税として物納した作品が中心で、1973年に死去したピカソが最後まで手元に大切に留めておいたものが多いということからも想像できます。

広い優雅な階段を昇っていくと、3つの階に37もの小部屋に別れて作品が展示されています。青の時代、バラ色の時代、キュビズム、新古典主義、シュルレアリスムと年代順に展示されていて、ピカソの画風の変化をたどることができます。白い壁面に効果的に絵画が配置されていて、彫刻、デッサン、陶器、版画、書簡なども並べられています。

そして、フランスには他にも2か所ピカソ美術館があります。2つとも彼が晩年を過ごしたカンヌ近郊にあります。パリからカンヌに向けてTGVで南下していくと、リヨン停車後小1時間くらいで、地中海世界に入ったのだと実感させてくれるように光の具合が変化します。またしばらくすると列車は海に出ます。その海の光を浴びながらカンヌに到着です。カンヌからはバスで30分ほど揺られてヴァロリス Vallauris の町に到着します。カンヌの北東の山の中腹にあたります。この町は古来より陶芸の盛んな町でした。1946年にこの町を訪れたピカソは、65歳にして陶芸という新しい表現手段に出会うことになります。それ以後、彼はパリにほとんど戻らずに南仏を中心に制作活動を続けたのです。この町にあるヴァロリス城 Château de Vallauris は、元は修道院で現在3つの美術館が入っています。その内の一つが国立ピカソ美術館になっていて、ピカソの『戦争と平和 La guerre et la paix』が修道院の礼拝堂の壁一面に描かれています。

この町から、バスで30分ほど海に向かって降りて行くとアンティープ Antibes に着きます。海を見下ろす静かな場所に、グリマルディ城 Château Grimaldi が建っていて、その中がピカソ美術館になっています。ここには唯一現存するピカソのアトリエと1946年にピカソがこの城に滞在したときの作品が展示されています。他にニコラ・ド・スタールの絵画作品、ジェルメーヌ・リシュの彫刻など現代美術が多数展示されている静かな空間です。窓には地中海の青い海と空がすがすがしく広がっています。外にも出られ、ダイナミックな世界に圧倒されます。

色鮮やかな陶器と赤茶色のレンガが印象的な南フランスの小さな旅です。近くには、コート・ダジュール最大の観光都市ニースが控えており、国立シャガール美術館、マティス美術館、ニース美術館(ラウル・デュフィ等のニースにゆかりのある画家の作品を集めています)などがあり、ピカソと同年代の画家の魅力的な絵を見ることが出来ます。



第 57 回奈良日仏シネクラブ例会案内：アニエス・ヴァルダのドキュメンタリー『落穂拾い』

❖日時：2022 年 7 月 31 日（日）13:30～17:00 ❖会場：奈良市西部公民館 4 階第 2 会議室（予定）

❖プログラム：『落穂拾い』（Les Glaneurs et la glaneuse, 2000 年, 82 分）❖参加費：会員 200 円、一般 300 円

❖問合わせ：Nasai206@gmail.com tel. 090-8538-2300

❖監督アニエス・ヴァルダ Agnès Varda (1928~2019)：ベルギー生まれ。ギリシャ人の父とフランス人の母を持つ。第 2 次大戦中、戦火を逃れて南仏セートに家族で疎開。ソルボンヌ大学で文学と心理学、ルーブル学院で美術史、写真映画学校で写真を学ぶ。はじめは写真家として活動するが 1954 年、映画『ラ・ポワント・クール』を 26 歳で自主製作、ヌーヴェルヴァーグに先立つ先駆的な作品として評価される。1962 年、のちに『シェルブールの雨傘』の監督で知られるジャック・ドゥミと結婚。子育てしながら精力的に映画を撮り続け、数々の賞を受賞する。2019 年 2 月、60 年以上に及ぶ自らの創作を語った『アニエスによるヴァルダ』を携えてベルリン国際映画祭に出席。その直後の 3 月にパリの自宅で息を引き取る。享年 90 歳 10 カ月。

❖『落穂拾い』：今から 22 年前、2000 年に公開された作品だが、今日見ても啓発される。オルセー美術館のミレーの絵画『落穂拾い』に描かれた女性たちの、腰をかかめて「拾う glaner」姿勢からヴァルダの連想が広がり小型カメラを携えて旅に出る。今なお落穂拾いをする人々、機械化された麦やジャガイモの収穫と規格外の作物が廃棄される現実、ブルゴーニュのブドウ畑に摘み残しをとりにくる人、ヴァンデ地方ノワールムーティエの養殖牡蠣の取り残しを持ち帰る人、パリの市場で捨てられた野菜を拾って食べる人、拾ったものを生かして芸術創造をする人、ボランティアで移民にフランス語を教える人…。フランス社会の様々な人々の存在や生き方が映し出される。その過程で、ヴァルダ自身「採集」が自らの存在や芸術創造のあり方の認識を深める契機となっていることに気づく。とりわけ、ミレーの『落穂拾い』に続いて、アラス美術館のジュール・ブルトン『落穂拾いの女』、ボヌの施療院のファン・デル・ウェイデン『最後の審判』、日本の百貨店の美術展のレンブラントの自画像、南仏ヴィルフランシユの美術館のエドワン『嵐を避ける落穂拾い』等、各地での絵画との出会いが、彼女に啓示をもたらしている。



《2022 年度第 2 回理事会報告》……事務局 日時：2022 年 5 月 19 日（木）15:00～16:45。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、喜多、菌田、藤村、三木、杉谷。議題 1. 会員数の確認。議題 2. 3/17 理事会後の活動：とくになし。議題 3. 今後の行事：(5/28) 第 150 回フランス・アラカルト「NARAFRANCE 物語」講師林薫子、(6/10) 美術クラブ例会「エコール・ド・パリの画家たち」、中之島美術館、(7/31) 第 57 回シネクラブ例会アニエス・ヴァルダ『落穂拾い』、10 月頃「秋の教養講座」、放送大学との共催講演会、フランス人との交流、フランス・アラカルトの今後の候補。議題 4. Mon Nara : No.299 6/13 発送、通信 No.13 8/8 発送予定。議題 5. その他：ホームページの管理。オリヴィエ・カテ個展。次回理事会 7 月 21 日（木）15：00～16：30「菜宴」にて。



編集後記 ☆爽やかな薫風の吹く 5 月も中旬を過ぎると、少しずつ陽射しが強くなり初夏のような暑さを感じる日もあります。ある日の午後、近所の空き地の隅に、列になって植えられているタチアオイの花が、臙脂、紅、薄桃、白など、色とりどりに咲いているのを目にしました。高さが 1~2 メートルもあって空高く伸びています。そんなタチアオイの花をみると「もうじき暑い季節が来るんだな」と、夏の「前触れ」のように感じます。陽射しの強さや気温が増した 6 月になっても、花は色あせることなく、おっとり太陽の光を浴び続けています。草花と樹木の間のような植物で、花そのものはよく目立つし綺麗なのですが、全体としては「美しい」というよりも、「強い」というイメージが先行してしまいます。☆原産はトルコや東ヨーロッパとされていて、日本には古い時代に薬用として渡来し、「万葉集」や「源氏物語」にも、関連する詩が詠まれているようです。☆以前、北フランスの田園地方を歩いている時、タチアオイの花が空き地の一角に咲いているのを目にしたことがあります。日本ほど暑くはなく風も涼やかなのに、花は日本と同じように咲いていて、フランス語でなんというのか名前を尋ねると、《rose trémière》と教えてくれました。rose の語を耳にした時は一瞬とまどいましたが、タチアオイの花をバラに結びつけるフランス的な感性に妙に感心して、イメージが少し変わったことを覚えています。(N. Asai)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。

◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2022 年 10 月号は **9 月 30 日**が原稿締切日です。

◆会員のみなさまで「Mon Nara」（2 月、6 月、10 月発行）又は「Mon Nara 通信」（4 月、8 月、12 月発行）に**チラシ同封を希望される方は**、1）内容がフランスに関わるもの、2）本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2022 年 6 月号 numéro299

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司